

タウンミーティング 対談要約

テーマ：縄文文化の謎に迫る

日時：平成31年3月9日(日)10:00～13:00内で実施

場所：メディアパーク2階 グリーンスタジオ

参加者：約180名

映画「縄文にハマる人々ー世界で最も美しい謎ー」を鑑賞して

対談内容

村越市長： ありがとうございます。たいへん楽しく見させていただきました。率直に面白かったなと思ったのは、何かに異常なまでの情熱を傾ける人たちに触れるということは、楽しいことだなということです。おそらく監督は、自身が縄文に魅せられたということもあると思いますが、縄文に憑りつかれている人たちに魅せられてしまったということもあるのではないのでしょうか。というのも、あそこまで思いを巡らせ、縄文に情熱をかけている人々が、言葉を選ばずに言うならば、それこそ好き勝手なことを、さまざまな場で議論しているのを目の当たりにして、その様子をドキュメンタリーに収めなければいけないという使命感にかられていたのではないかなと思ったのですが、そもそもこのドキュメンタリーを制作することになった動機とはどういうことだったのでしょうか。

山岡監督： このような作品を手掛けると、縄文について広げなければならないという使命感を持ってやっているように思われてしまうのですが、実は、大阪出身の人間にとって縄文というものは馴染みがないものなのです。関西の人々の多くは、京都や奈良から時代は始まったという感覚があり、我々が日本を作ったと思っているところもあります。

東京に出てきて、はじめて縄文について関心を抱いている人に出会うことになるのですが、何千年も前のことをまるで見てきたかのように語る人々を、初めのうちは、「この人たちは何なんだ…」とと思っていました。あまり付き合い合わない方がいいなと、そういう人とは距離を置いていたというのが、正直なところでは。

きっかけとしては、映画でも少し触れていたのですが、フェイスブックを始めるときに、パソコンのフォルダの中にあった遮光器土偶の写真を使用したところ、縄文好きの知り合いの方から連絡があり、どうしても会ってほしい人がいるということで、最初に登場していただいた弁護士の先生に会うことになったことです。

縄文についての印象は、ゼロというよりもマイナスからのスタートだったのですが、縄文そのものよりも、そこに情熱を傾ける人々が意外と面白くて、半ば笑いながらその人を撮っていました。そのうち僕自身が、縄文そのものに面白さを感じるようになり、気づけば続けてしまったというところです。

村越市長：　　そういう意味では、市川市にはたくさんの貝塚があり、掘ったら出てくるような環境です。そういう中で育っていると、何も珍しくなく感謝もしておらず、子どもの頃に社会科見学で、考古博物館に出かけた記憶はあっても、何も考えることもない、当然の環境だと思っていました。

しかし、こうしてあらためて立ち返ってみると、すごいことであり、みんなでアピールしてみたら面白いのではないかと思いました。例えば、作品にも出演されていたような、縄文に情熱を燃やしている人々に集まっていたら、議論できたら楽しいのではないのでしょうか。

山岡監督：　　作品の中では、一人一人尋ねていましたが、彼らが一堂に会すると、収集がつかないと思いますよ。

確かに、地元にあると、あまりピンとこないことも多いと思います。僕も、通天閣にいまだに上ったことがありません。地元というものは、そういった感じでわからないものだったりします。火焰土器を国宝にしようと動きがあった際も、当時の日本では、原始人の作ったものというイメージしかなく、なかなか難しかったそうですが、フランスの展覧会で評価を得たとたん、掌を返すように動き出したそうです。身近にあるものは、外から言われないとわからないものかもしれません。

村越市長：　　先日、私もフランスに行った際に、似たような経験をしました。行徳神輿のことで訪れたのですが、現地では神輿だけでなく、縄文も人気があり、たくさんの方が関心を持っている様子でした。そこでさらに驚かされたのが、展示されている土器が、実は市川市から出土したものだったということの後から知った時です。出土品は、昔は発掘した方のものであったので、堀之内貝塚から出土した土器は個人の方がお持ちだったりします。

以前、市としても、お譲りいただくとしたこともあったが、そのままになっていますので、私も、引き継いで頑張っていこうと考えています。

やはり周りが熱狂している熱が私にも移ったというところが、監督の経験と似ているところがあるような気がします。

映画を拝見していて思ったのは、いみじくもいとうせいこうさんがおっしゃっていた、「頭のいい人に話をされて、それを理解できない。」「謎なところが面白い。」と言うところです。ましてや、弥生人が稲作をはじめ、合理化されていく中で、やらなくなっていってしまう。「なんでやらなくなってしまったのか。」「どうしてなのか。」わからないところがすごく面白いと思

ます。そこにみんなが思いを巡らせて解き明かそうとする情熱がすごいいいことだと思いました。私自身も、なぜなのだろうかと、映画を見ながらずっと考えていました。「縄文人と弥生人は別の人なのかな?」「岡本太郎は縄文人なのかもしれないな。」そういうことを考えだすと興味はつきません。いたい、どうやったら解き明かすことができるんでしょうか。

山岡監督：　それがわかるなら解き明かしたいところです。

学生の頃、社会科の教科書で火焰土器を見ても、特別な時につかうものという印象を持っていました。しかし、どうも日常品として使っていたようだということを知った時、どういうことなのだろう?と思ったことが入口だったように思います。

使い勝手が悪い、合理的でないという話でふと思ったのですが、嫁に、段取りが悪いとか、もうちょっと合理的に物事を進めた方がいいというような話をします。しかしこれは、弥生時代以降、男性が中心となって作り上げてきた社会の中で、合理的に回さないといけないという固定概念が凝り固まってきたのからなのかもしれません。縄文時代は、普段、僕が嫁に話しているようなことが、真逆に成立していた社会の一つの形なのかもしれません。

そうして考えていくと、どういう思いでつくったのか、どういう効果があったのかということと話していること自体、合理的な社会の中での物言いなので、よくないのだと思います。僕らの生きているこの社会とは全然違う社会もありえるということ、縄文土器が見せてくれているのかもしれない。合理的かどうかとか、不思議と感ずること自体、縄文人からするとおかしいのだと思います。

人間の能力や知識というものは、時代が進むにつれて増えている印象があります。しかし、実際にはそうではなく、同じキャパシティーの中で使っている方向が違うだけで、ある幅の中でしか見ることはできないのではないかと。縄文土器を見ているとそう感じるところがあります。

僕らの思っている、こうでないとダメというルールとは、全然違う考えで物事を進めていたのではないかと思うと、日頃、嫁に話していることが、そのまま自分に返ってきているように感じます。

村越市長：　私は、余計なことをしている人の方が、有益なことがあるのではないかと考えています。だからこそ、縄文人の生活に豊かさがああり、争いが無く、1万年も続いたのかなと考えさせられるところがあるわけです。

余計なことばかりにとらわれて、無駄なことをやる時間がないといいことがないのではないのでしょうか。それこそスマホをいじっていると、そこに縛られてしまい、何もいいことが無いように感じることもあります。

だから縄文人は、一見すると無駄なことをやっているように見えても、実

はそこにも秩序があり、文化もあるのだと思います。我々の住むこの台地に5000年も前に住んでいた人たちは、立派な人たちだったんだと考えさせられるところです。

山岡監督： 縄文時代は1万年も続いたから見習うべきなど、いろいろなことを言う人がいます。しかし、彼らは続けようと思っていたわけではなく、死なないように頑張ってきた結果そうなったのです。しかし、結果そうなったということこそ、大事なことなのかもしれません。

縄文土器といっても、作っていた時代によってさまざまですが、どれも食べ物を作る道具であることに違いはありません。しかし、いろいろな場面で、美術やアート作品として見られがちです。あくまで日用品であることが大切であると考えています。

今、僕らは、アートとか宗教とか、いろいろなカテゴリーに分けて考えていますが、根本的なところで「食べる」という行為がきちんと成り立たないと、祈っていても仕方がないことになってしまいます。もともと宗教などいろいろな人間の営みが何も分類されていない中で、命のやりとりと食べ物をいただくことの、バランスをうまくとっていたことが、1万年も続いた結果を生み出したのだと思います。

村越市長： 火焰土器の多くは新潟で出土するように、地域性があるようですが、例えば、「ある人だけがうまく作れたのかもしれない」「その人が親戚に技術を教えたのかもしれない」「もしかするとアーティスト的な人がいたのかもしれない」といったことを考えていくと、とてもユニークですね。

山岡監督： 無駄という話で思い出したのですが、インドにタージマハルというものがあります。あれは王様の嫁さんの墓で、あんな大きな墓をつくることで、金を使いすぎて結果的に国が滅んでしまいます。しかし、あの地方に住む人々は、その王様があれを作ったおかげで、今でもご飯が食べられているわけです。もし、あの王様がいなかったら、まったく別の展開になっていたと思います。現地に行って知ったのですが、実はさらに、川岸にもう1つ自分の墓として黒いタージマハルを造る計画をしていたそうです。もしそうになっていたら、また違った風景が広がっていたのかもしれません。タージマハルを見たときに、無駄なことの大事さを感じ、それが歴史を作ったのかと思うと感動的でした。

フロアからの質問

—かつて縄文人が築いていたといわれる日高見の国の話を聞かせてください。

山岡監督： わからないです。きちんとした人に聞かないと、適当なことは言えません。

—人類の祖先はアフリカで始まりました。縄文時代にアフリカから来た女性と縄文男性が結婚したと新聞で読みました。皆一つなのに、なぜ国同士は仲良くならないのでしょうか。

山岡監督： 1つは、農耕が始まったからではないでしょうか。農耕が始まると、「私のもの」と「あなたのもの」が明確に分かれます。それが欲しいと思った時に、それを奪うようになってしまった。「私」というものが確立し出した時に、こうなってしまったわけなので、そろそろ「私」というものを見直す時期にあるのではないかなと思う。

今でも狩猟・採集で暮らしている方は、世界中にいらっしゃいますが、基本的にはみなさん明るい。例えば、獲物を獲ってきて、獲った人が少し多くということもせず、獲った人が偉ぶることもない。基本的には、獲ってきた人も、最終的に獲っただけで、元々は自然のものであるのだから、これは「私のもの」とすること自体がナンセンスという感覚で生きている。農耕が始まると、ついつい一生懸命耕したのだからあげられないとかが始まってしまう。「私」と「あなた」というところが変わらないと、戦争や争いは無くならないと思う。

村越市長： 「私」という漢字は、稲穂を囲い込むさまを表しているので、そもそも原始共産制というものは成り立たないと、何かで聞いたことがあります。稲作を中心とした弥生文化が、縄文文化を滅ぼしたということなのでしょう。

山岡監督： そうかもしれません。ただし、その稲作を選んだのも縄文人です。土肥先生から、縄文人が米を選んだ理由について「米がうまかったから」だと伺ったことがある。まさか縄文人も、自分たちの選択で、ゆくゆくこのような流れになっていくとは思っていなかったと思いますが。

—真間山のふもとに住んでいるのですが、ママという地名が縄文時代からあったのではと想像しています。ママという地名はがけを意味するようですが、関東には市川以外にも真間下湧水などの地名が残っています。各地のママの近くに縄文遺跡が多ければ、あながち間違いではないのでは？今後調べたいテーマの1つです。

山岡監督： 縄文遺跡の分布するところには、大まかな共通点はあると思います。なので、たくさんの発掘経験のある方は、「ここらへんを掘ったら出るな」ということが、掘らなくてもある程度わかるようです。今とちがってどこに住んでもいい時代にあって、「ここに住もう」と決めるからには、何か彼らなりの理由があったのではと考えることにはうなずける。どこに住んでもいいとはいえ、住む場所を選択

するにあたって、水辺との距離などは大きな要因の1つになったのではないかと
思います。今の水の状態が数千年前と一緒かどうかはわかりませんが、きっとそ
ういう共通点はあったのではないかなとかんがえています。

村越市長： これは面白いなと思ったのが、ママという表現を縄文人が使っていたとして、
それはロマンがあって素敵だなと思うのですが、他にも、なぜ土偶などの技術が
今に伝わらずに謎に包まれてしまっているのかと考えると、文字がなかったこと
など、さまざまな要因があると思いますが、それでもなんとなく形を変えながら
現代に伝わっていてもおかしくないのではないかと、私は思います。

山岡監督： 米作りにあまり土偶が役立たなかったからでしょうかね。

村越市長： 3000年～4000年後の我々からすると、デザインが面白かったり魅力的
であったりするが、それは我々が積極的に価値を見出しているということなんで
でしょうかね。

山岡監督： 全然違うルールで作られているものなので、「あれ？」と一瞬でも思うと、深
みにはまっていってしまう。なぜ土偶が作られたのかという理由も、さまざま
と思う。よく安産を願うなどと言われるが、数万個しか見つかっていないわけで、
年に数個しか作られていない計算になり、数としては決して多くない。なので、
さまざまな理由があったと考えるべきなのかなと思います。なぜ伝わらなかった
のかという理由は、やはり米作りの時代に役立たなかったからではないでしょ
うか。

縄文時代から残っている言葉に関しては 2 音節なのではないかとも言われて
います。そういうものも面白いかもしれませんね。

一縄文人がネイティブジャパニーズだと思っているのですが、彼らの残してくれたもの
を見て、感動が湧いてくるのが誇らしく、嬉しいです。

山岡監督： 感想ですね…。僕は関西の人間なので、あまりネイティブ感はないかもしれ
ません。

一私は、兵庫県出身で、小さいころから考古遺物のようなものに興味がありました。貝塚
や化石にも興味があったので、身近にはなく、本や教科書の中のものでした。でも、市川
で、子どもの夏休みの宿題で訪れた考古博物館(に隣接する堀之内貝塚)には、ころころと転
がる貝塚の貝があり、うれしくて感動しました。しかし、あまりに普通にあり不思議で
した。すごいよ！何千年も前のものが今もあるやん！と大騒ぎしました。もっと市内の子ど
もに縄文時代の学習をしてもらい、語れるようにしたほうがいいと思います。

山岡監督： いいと思いますって市長が言われているんですよ？

村越市長： もっとやります。

一同： 拍手

その他

Q 縄文人は、ここまで造形にこだわったのでしょうか？

A 縄文時代の実用品の中には、土器のように過剰とも思える装飾があることから、精神文化が反映されていると考えられています。一見して、こだわりを感じるのは、そのためではないでしょうか。

Q 縄文の独特な世界はなぜ断絶してしまったのでしょうか？

A 狩猟・採集を生業としていた縄文文化は、水稻農業を生業とする大陸起源の弥生文化を受け入れたことから消滅してしまいました。

Q 縄文時代から稲作が始まっていたと新聞で聞きました。弥生土器より縄文土器の方が脆いと昔習いましたが、縄文土器でお米を炊くことが出来たのでしょうか？

A 現在の研究では、水稻農業の開始をもって弥生時代が始まると考えられています。縄文土器でお米を調理することは可能ですが、火力の調節が難しいことから、おこげができたり、雑炊のようになってしまう可能性があります。

Q 市川市の考古・歴史博物館は見学する施設としてはあまりに建物も展示物貧弱です。建替の計画もあるようですが、駐車場の設備なども含めて楽しみながら勉強ができる施設として計画されていますか？いつ頃完成の予定ですか？

A 考古博物館と歴史博物館の建て替えについては、他の公共施設の建て替え計画を踏まえ、施設内容や実施時期を検討しており、時期等は未定です。